

1 階段をのぼって

階段をのぼって左に行くと
つきあたりに室があります
室の中を行くと本棚があります
本棚の中の本を自由に見て下さい
俺は 階段をのぼって左へ行った
つきあたりの室の中に入らうとした
室の中には蒲団がしいてあつた

俺は 階段をのぼって左へ行った
つきあたりの室の中に入らうとした
室の中には蒲団がしいてあつた
室の中には誰かが寝てゐますよ

そんなはずはない 入つてごらんなさい
俺は室の中に入った 誰かがこちらに
尻を立ててゐた 半陰陽を見た

雨戸のあひだから日の光がしのびこみ
蒲団の模様の上を焼いてゐる
本棚なんかありはしない

2 赤ら顔の

赤ら顔の丸い男が窓の中にて それは
読書する人か 外には風が吹いてゐる
竹が数本ゆれて 誰かがそこを訪れようとしてゐる
木の葉が一枚一枚色づいて 散つてゐる

山には山肌の現れてゐる所がある
途中から 早い小さい流れが 滝のやうになつて
山を割つて木の間を下る
雲がそこを通りすぎて行く

「人生は燈火のやうなものだ
今 生きてゐても 次の瞬間にはどうなるものか
来る者あり 待つ者あり 待つ者として何を待つのか

流れのしづかな岸边には
糸をたれてゐる人間もあるが これもまた「待つ者」
絵の上の方にはこんな文字も黒々と小さく並んでゐる

3 頼光は

頼光は麦藁帽子が大好きであつた
頼光は家具商の息子であつた
彼は自分が狂つてゐることを知つてゐる
父親をぶんなぐつて殺さうと思つてゐた

彼は女がベッドの前で下着をまるめるのを
うれしい気持で眺めてゐた
頼光の財布の中には金がぎつしりつまつてゐた
彼は彼のものを見せない主義であつた

ネオンの明滅がはげしく複雑に色彩を変へてゐる
彼は女の顔がいやにでかいと思つた
大きい彼の母親の顔

二人とも馬鹿な具合になつて
頼光は下から退治したと言つて笑つた
彼は その時以来 家具商として独立した